

政治倫理考

松 井 喜代司

はじめ

一年前、日本道德教育学会の代表理事片山清一先生に依頼され「道德と教育」の機関誌に学校における政治的教養と道德教育のテーマで小稿を記載させていただいたが、限られた枚数で意するところの目的を果すことができなかった。ためにこの小稿はその姉妹篇として政治倫理考を専ら徳治主義に求め、その理念が今日少しでも道德教育に役立てることができ得ればと願って執筆した次第である。今日の教育・精神面の荒廃はまことに遺憾に堪えないものがあり、文部省では昨年以來、道德教育推進校の事業をおこなうため、小・中学校計94校を指定し昭和59年・60年度の2ヶ年にわたって実践研究をすることにふみきったことは周知の通りである。これは昭和58年度まで指定してきた道德教育協同推進校とは異なり、とくに学校と家庭の連繫を深めることをねらったものであり、名づけて「学校・家庭連携推進校」と呼んでいる。ともあれ政府がうちだした臨教審においても教育改革が政治の上に表面化し、最重点の国民的課題になっていることは言うまでもない。と同時に教育界でも専ら人間形成としての知育・徳育・体育、なかんづく道德教育の在り方などの基本問題が提起され至るところで議論を沸かせている。筆者の加入している学者・文化人グループの「時代を刷新する会」においても徳育の重視に関連して「中国古来の道德思想」を教育の場にとりいれたらどうかを再検討し、参議院会館第一会議室にて改めて中国古代からの道德思想は現代に生き残れるかのテーマで中国

思想の専門家によるシンポジウムを開催，各論にわたって意見開陳をしたことがある。その結果，現代の精神的動乱期の地割れから若い世代が立ちあがり，温故知新の気概をもって道德の基準を東洋政治の天理人道の教えに求め，父祖伝来の自覚・反省・修行・実践の成果に鑑み，その伝統をさらに反顧し，練り直し，現在および将来に適応する道を開いていく努力の結晶を希っていたことを記しておく。前掲小稿に「転換期とか変革期とかいっているこの時代に国民が等しく願っているのは，ゆがんできたこの国の民主主義教育の弊害を早く払拭することにある」と述べておいたが，一日も早く政治浄化を計ると同時に政治的教養のレベル・アップを高めていきたいものと願っている。この意味で筆者は前述の小稿において，政治学を専攻する学究の徒として，現代日本のさまざまなおそろべき異常現象に対処して，そのギャップをどのように調整していくのか，また教育をいかに立て直すかについての意見を若干挿入しておいたので回顧再見してみることにする。一体に小・中・高での政治教養のあり方は，いってみれば巾広い社会教育講座の一環として設けられたものであって，大学でいう専門教科としての政治学でない。いわゆる「政治経済」・「現代社会」・「公民科」としての社会学科目でこれは良識を高めるために設けられたものである。しかし今日のように世相が多様化してくるに従って政治の分野が多面的に専門分化されるので教師によって教え方がマチマチになっていることを知らねばなるまい。また別の角度からみれば，道德教育の基礎的知識が政治のシステムの形態のなかで思想的アナーキー状態になっているから，一層困難なものになっていることも容認しなければならない。しかし，いずれにせよ民主主義の社会にあっては政治の進路を決定する権利と責任はあくまでも国民自身にあるから，その意味においてもいろいろな事態を深く洞察して研究しなければならないことになる。そんなわけで筆者は大学での政治学の講義をできる限り基本問題にシボリ，的確に「政治を見る眼」を養っていくことに心がけている。前述のように世故にうとい小・

中・高生の先生、特に政治経済を受持つ教師陣の責任は重大な使命をもつことになると思うし、またそれらの教師群像のパーソナリティも問題になってくる。教育は言うまでもなく人作りである以上、魂のある人間を養成すべきものであるから、それを忘れてただ単に知識・技術をもった人間を機械の部品のように作為したならば、とりかえしのつかないことになる。仏つくって魂いれずの教育論は過去においても繰言されている以謂である。「学校における政治的教養と道德教育は抜群の国家環境と社会条件を実効あらしめる方法として教育憲法——すなわち教育基本法を根本精神と定めているから、教育の力こそ政治倫理の根源である」と道德と教育論のなかで高橋教授も言っておられたが、政治はつねに国民のためにあり、国民はつねに倫理的価値感を求め、時の政治を監視し、教育の力により目覚めた政治的教育により民主政治の発達推進をはからねばならない。高橋教授と同様、教職にあるものとして今こそ政治倫理の原点を再認識し、日に心すべきものと思う。

政治倫理と言うけれど

昨年来より政治の情勢に対応して衆参両院では政治倫理の問題をとりあげて、殊更に政治倫理の確立に対しての審議を行い、その結果、「政治倫理綱領」を作成し大気焔をあげていたが、国民世論による政治倫理の方角とはほど遠いような気がしてならない。すくなくとも国民の願っているものは識見の高い政治家が世に出られるような形の倫理綱領の確立であることに相違ない。清濁あわせのむ的政治家は最早この世に必要としないのである。政治倫理は政治の浄化ということが目的となっている以上、きれいな政治を行うことを意味づけているから、民主政治にあっては個人の尊厳を根本とした最大多数の最大幸福的価値の追求を理念とし、その国民の倫理的要求——換言すれば国家の統治作用に関する善悪選別の機能を果すべき

性格をもっているから、政治家は自ら守るべき倫理——行動の基準を決めてかからなければならないことになる。いまさらながらプラトンの理想国家論や孟子の革命的天命思想の学説を引用するつもりはないが、いやしくも人の頭に立つ人の心構えとして「個性の完備」への道の厳しさに目ざめてほしいものである。で、このことについては後段に譲るとしてもロッキード事件の田中問題が政治倫理の恰好の餌食になって、野党がことあげて政治倫理論をふりまわしていたが、その後田中元総理の病気入院によりいつの間にか政治倫理問題が消炭状態となってしまったことは笑止千万と言わざるをえまい。もちろん田中問題をきっかけとして、国会議員の政治倫理の高揚論が高まったことはよい傾向である。その対象を国会の内外を問わず政治的道義的責任のある「有責議員」に及ぶと拡大し、そのうちには有罪議員や政治倫理に著しく違反した議員などが含まれるとの解釈が示されるなど次第にその焦点が明確になったことは、法治国家の立場からいって当然の理である。しかし、法は必ずしも政治倫理の強制になじまない性格の一面をもっているから、田中問題について議論されている憲法解釈や、立法上の問題点については、底なし沼に漂う浮草のようなもので困難な対立論議をよぶことは必至であろう。

ここで視点を変えて筆者は今から10年前——1976年7月28日、ヒルトンホテルで行われた福田元総理の「党の出直し改革論」なるテーマをブチあげた講演内容のアラスジを紹介してみる。この頃は角福戦争はなやかなりし頃で、政治における群雄割拠が浮堀りにされてくるような気がしてならない。当時の福田さんは副総理で経企庁長官をも兼務しておられたはずである。で、党の出直し改革論について冒頭から意味ありげな論調で「田中角栄前総理がロッキード汚職にからみ逮捕され、政界は明けても暮れても朝から晩までロッキード、ロッキードで……これは日本政治の信用にかかわる問題であるから、徹底的に解明しなければならない」と自らが姿勢を正して「少しカミシモを着、あるいはよろいまで着て話さなければなら

ん」と喝破し、途中、話題をかえて経企庁サイドの模様をひとくさり。高度生長期よりツマ先立ち成長期に入ったわが国の経済事情をサラリと一瞥し、はては石油ショックから所得政策論、景気対策等々の安定成長路線を定着させるまでの経過説明をお得意の弁でマクし立て、最終的に「ひょっとすると、ひょっとという事態に（実際はひょっとするどころかナニもでなかったが）——解党、新党の決意をもって出直し改革を……云々と。かなり威勢のいいことをいっていたが、今となっては夏の夢物語りにすぎない。ただこの講演で気になることは次の論旨である。福田さんのスッキリしないいわば奥歯にもののはさまったような言い分なのである。「田中元首相の逮捕……これで事件はおしまいというような意味合いをもつものであるのか、あるいはこれが突破口であるのか……その辺の見透しが、これは政局の前途と非常に関係があるのでありますが、これがどうも私ども局外者の立場から見ますとはっきりしない。……さあ……富士山のような形で、もうこれは頂上だ。あとは急角度で終息に向かって動くのか、あるいは鋸山みたいな形で、また次にも次にも山があるのか、その辺の見通しははっきりしない。そういう状態で、ただいまの政局というものは、まだきわめて先の見通しがむずかしい段階でございます」と。そして「私はこの事件の徹底解明ということを書いておりましたが、しかしこの問題は徹底解明という事件処理を完了したというだけでは事件の解決にはならん。解明されたけれども解決にはならんということを書いてきておるのです。つまりロッキード事件、この問題は事件としての徹底解明を要するけれども、この事件はただ単に偶発的に起こったものじゃない、根っ子があるのです。その根っ子をえぐりだすということで、初めてこの事件の解決ということになる。私は一昨年 of 金脈問題のときも自由民主党の出直し改革論ということ唱えました。まさにそういう点に着眼をしたわけなんでございますが一つの改革をやることは政治とすると非常にむずかしい問題であります——（中略）——このロッキード事件を契機といたしまして、クロい

ものは全部切り捨てる。しみもあかも洗い落とす。そうしてこうきれいに生まれ変わりました。どうぞご支援下さいと言って総選挙に臨むほかないのじゃあるまいか。そういうふうに思うのです。どうも最近、政治は力である。力は金であるというような風潮があったわけではありますが、そういういろいろな国民から批判を受ける自由民主党の姿勢なり、あるいは行状、マナー、そういうふうな自由民主党になりましたという姿勢をこの際ととのえるということに最大の政治家としての努力を傾注してみたい……こういうふうに考えております」云々。いま福田元総理の演説内容を長々と書きまくったが、新聞も毎日・日経などではこれを重大視して報道していたことを記憶しているが、これは福田さんが当時の三木首相に宣戦布告をしたものとして今でも政界の裏話しとなっている。灰聞するところによれば、三木首相は閣議の終了後、福田副総理に「福田君、キミのいっている出直し改革って何かね」といきなり尋問したという。これに対して福田さんは「それよりアナタは田中氏の逮捕を早く知っていたそうじゃないか」と切り返し、チョウチョウハッシーやったとか……ともあれ軍配は福田副総理に上がったようだが、この講演内容によほどカチンときたらしい。筆者はこの時点での福田さんのいう出直し改革論——場合によっては解党、あるいは新党を——の意気込みがあったことを礼讃するとしても、今一つ突込んで自由民主党としての責任において、政治倫理の信条をより鮮明に吐露してほしかった。昭和の「水戸黄門」が取沙汰されてきたのはこの辺からだと思うが、できることなら福田さんの水戸学的政治倫理考をお聞かせ願いたいものである。さて福田講演で協道にそれたがあれから10年一昔、ずいぶんとこの問題がだらだらと続いているが、結局は法律論争よりもむしろ田中元首相問題展開の節目ごとに辞職勧告のルール化をめぐる政治論議が繰り返されるだけになる虞れがある。しかも力の論理の政治論のみが独立し政治倫理の実践がなおざりにされ放置されることは恐れ入った話であり、悪くすると民主政治の否定にもつながりかねない危惧の念を

抱かせしめるだけである。高橋教授が「せいじりんりの実践は、法治主義の水準で論議するときは、とても具体化が困難な問題であることを理解でき、むしろ民主政治を支える国民各層の広範な政治倫理の向上にまつほかはないことに気づく」といていたが筆者も全く同感である。

法律と倫理との関係

西洋流の外面的な法治主義の欠陥を東洋流の内面的な徳治主義によって是正することは差迫った問題である。要は東洋における固有の政治理念は西洋のそれに比し格段の差異があって奥深い哲学的意味を含んでいることを認識せねばならない。つまり東洋学で研究方法ということは、むしろ狭い解釈であって、東洋ことに日本、中国でいう「学」の意義は欧米でいうサイエンス・ヴィッセンシャフト、シャンスなどでいう認識または知識だけではつくしえないものがある。西洋でいう研究方法に当るものは東洋学では「道」であるといっている。西洋科学も哲学も普遍的であることを要求しているが、それは理性の妥当でもある。もちろん東洋学にも普遍的な要請があるけれども、それは「道」の周行であって、西洋科学が非人格的客観的な観点に立とうとするに対して、東洋学は人格的主観的の特徴を有するから政治の根本理念も道義的にみて、香り高きものになってくるのである。もとよりわが国の優れた学者たちは、西洋の外面化した政治概念の研究だけに満足していない。世界に起りつつある画期的な思想的変革に対応し得るには、どうしても東洋的な政治理念を revitalize しなければならない。このように形而上学的な意味の深い東洋政治の理想により、西洋から借用した機構制度を能率的に利用すべきものだと思う。そこで筆者はこの際、近代政治の核としての役割を演じている法律と倫理との関係を一層明らかにするために師父鷗沢総明博士の著書、「法律と道德との関係」の文を引用し解明することにしたい。そうすることにより、法治主義のもつ

原理特性のなかで未整理のまま受けつがれてきた政治倫理——徳治主義を再認識することができるものと信ずるからに他ならない。

さて「倫理」の熟語の上に「政治」の語をのせて「政治倫理」という四文字のことは新聞紙上やマスコミをにぎやかにしているが、なんのことはない——倫理とは言ってみれば人のふみ行う道のことである。従って政治＝倫理とあるからには、政治家としてのふみ行うべき道ということになる。もちろん倫理の定義は、その発達を経路においては哲学の影響をうけていたことを多としているが、近来では単純な科学の要分として研鑽されるようになっている。その人倫道德の原理を教える「学」が倫理学であり、或は道義学と呼んでおり、広汎な意義で解釈すれば、人類の性格および行為の理想に関する学問になる。それでは理想とは一体なにか。——ある学者はこれを説明して「至高最善の目的なり」といい「最高至善に到達した瞬際における満足の状態である」といっている。この説明を一応隠当としてみるが、ただ倫理学を理想に関する学問であるとすれば、(1)各個人の経験社会の秩序国家の発達等より生起する行為現象を攻究しなければならないし、また(2)理想の規範を標準として行為現象の善悪正邪を判断しなければならない。さらに(3)進んでこれを実践して理想境裡に到達することを教えるものとして解釈せねばならないこととなる。筆者も倫理学を科学であると断ずるに決してやぶさかでないが、前述のようにそれは理想の上に建設されるものであるから、むしろ哲学の研究問題に近いものがあるとしてみたい。古来よりの学説を假りに大別してみると、第一は道德理想の特別な見解に基くものであり、第二は道德理想の真価を意識する上の見解の差別に基くものに分けられる。前者の分野に快樂説、完全説、自己実現説が内包され、後者には直覚説、経験説等の学派があるという。筆者はこれらの学派に関する説明は省くとしても、快樂説に属する学者の一人であるホッブスをとりあげ、彼の法と倫理の考え方を探索してみることにする。

快樂説は快樂を増進することによって苦痛を減却させる、つまり快樂と

苦痛の度合いをもって行為の道德価値を判断する学説であって、ホッブスの説によれば人は自然の状態においては唯戦争あるのみといている。従ってそこには善もなく悪もなくまた不正義もないのである。戦争の状態にあっては単に戦徳あるのみで、詭計暴力だけが存する。しかし人には死を恐怖する情がある。そこから人はついに平和を欲求するようになり、平和に達する便法として理性の教うところは合意であるはずだと説いている。これを称してホッブスは自然の法則と謂う。この法則は生命保護の法則でなければならない。だから彼はこの自然の法則を区分して第一を自然の根本法となし、平和を欲求し、これに従うこととした。またその第二を自然の権利の総額とし、一切の手段方策をもって人類自身を防衛することとした。即ちホッブスは自然の権利と自然法とを区別したのであった。ホッブスはこのようにして論歩を進めて権利の移転を説き、契約を論じ、ついに契約を保障するの必要として国家の成立を論じたのである。国家は「人々がその締結した契約を履行する」ことをその根源において、そこから道德觀念が生ずるものであるとホッブスは考えたのである。例えば契約を破る行為は悪であり不義である。これに従うのが善であり義である。だから道德倫理というものは、このように法律によってはじめてその形象を執り、漸く実行されるものであるときめつけている。これはホッブス議論の大要であって、彼の論はこのように法律を基礎として道德を説明している。で、彼は法律国家の起源は、人類が終局において死を恐れる結果、平和を欲求することにあるから、それ故、「国家ありて然る後に道德あり」と思惟したのであった。しかし、東洋における孔孟の仁義説はこの説と真正面から対立する。大学に「古之欲明明徳於天下者。先治其国。欲治其国者。先齊其家。欲齊其家者。先修其身。欲脩其身者。先正其心。欲正其心者。先誠其意。欲誠其意者。先致其知。致知在格物」と。これは格物致知、以て意を誠にし、心正しくして、然る後に国家を治めんとするものであって、団体の強制力を頼むものでなく、またその必要もなく、自ら倫理道德

の理想に到達することを務め、他人を感化し国家を化育せんとしているのである。孔孟の仁義説は利慾に出で権勢によって維持しようとする平和は恃むに足らざるものであって、一に繋って王を尊び覇を斥けるの精神が宿っているものと思われる。筆者はこの項でホッブスと孔孟の説をことあげて論評するものではないが、ただ西洋と東洋においては、その政治論、法律論、倫理論にしても各々のとらえどころ、感覚のつかみ方によって意見のクイ違いを発見することを確認するために比較した次第である。尚、汎い意味の快樂説に属する学者で倫理と法律との関係、交渉の厚きを説いているロックとヒュームがいることを忘れてはならない。ロックは人類行為の判断の標準として第一に神法。第二に国法。第三に輿論法を挙げ、国法は有罪無罪の準尺として強大な力を有するものであると説いている。ヒュームも快樂説であるが、むしろ功利説に近い学者で彼は道德義務の二種を説いている。第一種は責務の一切の觀念より全く離れて、自然の本能または直接の傾向より発するもの、第二種は人類社会の必要に基き責務の觀念より生ずるものであるとしている。つまり第一に属するものは、親の子に対する感情、感謝の念、惻隱の心等であり、第二の類に入るものは正義即ち他人の財産に関する敬意及び信実即ち約束の履行等であると。ヒュームの説くところは、道德上の正義及び信実は法律上の正義及び信実と全然同一であるとみなしていることである。この説明に関しては省略するとしても、ヒュームの「宇宙は滅ぶるとも正義を為さしめよ」との格言は本末顛倒なきことを説いたものであり、また「人民の安全は無上法律なり」との格言をもって千世万世に至るまで、人民の感覚に快いことを論じたことは卓見すべきものがあるといつてよい。完全説、実現説等の学派に属するスピノザ、ライプニッツ等の法律論が倫理学と密接な関係をもっていることは識者の知るところである。ヘーゲルの刑法説が倫理学と相離れざる関係を有していることも、またカントの法律論の類も倫理説より出たものといつてよく、経験説に属するコントにしても利他主義の点におい

て、社会主義を基調とする法律論と相関係している。このようにしてみれば、倫理・法律の学説の親密度を測定するには、二学相呼応して研究しなければならないことになる。つまり倫理学を完全に知るためには法律学の研究を必要としなければならないし、後者を研究しようとするれば前者の知識をないがしろにしてはならないということになる。この項の終わりに臨み、法律学と倫理学との差別を一言すれば、後者は専ら個人の性格及び行為の理想に関するものであって、前者は主として共存生活の考案に関する研究であることを添筆しておく。

徳治主義再顧

一昔も前になるが「東洋政治の思想的特質」の小稿のなかで、筆者は徳治主義を論じたことがある。今回は徳治主義を再顧することによって、東洋における政治観とその人倫研究の目的を果すことにしたい。前にも述べておいたが、道德・法律・政治・経済・教育等の原理はその適用に関する限り、時と所における現実の事情を顧慮しなければならない、としてもその根本義はあくまでも天地公道に基づくものでなければならない——それは古今東西を通じての古聖賢、君子によって教示された権威ある「道の学」であるといっても過言でない。その一大教理は未来永劫性をもつものとして継承されてきたし、またそのような教育指導をうけて育ってきたわれわれは、古いものに拘泥するわけではないが一考すべきものがあると思う。古代中国において耕やされてきた根強い前近代的な心象が歴史と伝統のなかで別個の発達をとげながら、中国——日本との縦の精神文化が完全に保存され、それがいつの世においても潜在意識的に相当力強く人心を動かしてきたかを知っているから、一層感深きものを覚えるのである。それ故、西洋の政治を意味するポリティクスがそのまま日本の政治形態になるということは許容されない。周知の如く西洋におけるポリティクスは語源

的にはギリシアの都市，ポリスに渊源しており，わが国ではそれをそのまま政治と訳して使用してきただけであるから，基本的には東洋における固有の政治理念は，西洋のそれに比し格段の差異があって，奥深い哲学的意味を含んでいることを認識せねばなるまい。このことについては既に述べておいたが，東洋における政治的人倫論を聖人・賢人・君子に求めなければ結論に到達することができないので，再び師父鵜沢先生の卓越した名著「法律哲学」（6頁）を引用することを許されたい。それによれば「（前略）——政治・法律・道德・宗教にしてもいずれも種族の色彩を帯びて発達し，又は停頓し，又は革新する事実もまた看過し難いものがある」といいさらに「地上には種族があり，民族があり，国家が存立し，これらが一層拡大されて人類社会が造成される」のであるから，「これを導く法則及び規範は平等原理に立つこともあり，差別意識に立つこともある。然も規範は偉人を待って発展する」と考え，ウインデルバンドの学説を引用して「完全な人とはその行動が必ず『のり・矩・規範』に適合し，普通の承認を要請するに足り得べき者をこそ」——といい「彼の完全な人とは即ち偉人である」ことを指摘している。いってみれば神聖という人も聖賢と称えられる者もすべてその範疇に入ることになる。で，このような人たちが人類向上に注ぐ思慮願念とするものは，決して浅いものでないことをわれわれに知らしめている。また「おそらく世界多くの民族の殆んどは例外なく，それらが有する偉人の伝説を誇ることを忘れてはいない」ことを強調し，「法律・道德・宗教の三大思想は彼等と離るべからざる関係を有している」ことをも教示している。かくして東洋学でいう道の考察はこうした背景から学びとらねばならない，としても，その行手に曲学阿世の暗雲が漂説することを嘆いておられた。すなわち「進化論的に種の起源を説明する人たちは，その現実を否定したり，あるいは生物学の説明限界を踰えて漫りに世界観を試みる自然科学者の一部の人たちは，その科学によって聖人，偉人を駆逐し，やがて法律科学もそれに似通った傾向を示してきている」こ

とは遺憾に堪えないものがあると述懐していたが領可できよう。さらに時弊を指摘して人々に反省を教えた老子の絶聖棄智・絶学無憂の警語を丹念に説いておられたが実に頭の下る思いである。

要するに法律と倫理の関係の項で述べたように西洋流の外面的な法治主義の欠陥を東洋流の内面的な徳治主義をもって、是正することが差迫った問題であるので、ここにいくつかの例を挙げて徳治主義再顧の項をにつめていくことにする。論語の為政篇に「為政以德。譬如北辰居其所。而衆星共之也。」と説いているのもまた「道之以政。齊之以刑。民免而無耻。道之以徳。齊之以礼。有耻且格。」と断じたのも、これは明らかに一人の明徳、つまり為政者（政治家）が団体を服従せしめたことを示したものではない。このような理論的考想は孟子も抱いていた。で、この説を要約してみると仁義説においては化育をもって一切を律しようとした政治論であり、また法律論でもあった。つまり孔子は徳治主義を為政の方法とし、「仁」を基礎とする道德説を学的体系によって理論づけたのである。それ故、孔子の思想を端的に表わすならば、政治的には有徳者による道德政治の原則を確立し、社会的には正しい封建制度を樹立し、この両者を可能ならしめる基礎として、先づ人間殊に支配階級の倫理的自覚及び向上を期せんとしたものであった。だから孔子の唱えた「仁」は意識された道德の総和を意味すると同時に、あらゆる道德に欠くべからざる共通の基礎として意識されたのである。で、このようにして作成された徳治政治の為政は、「仁政」を為すことが目的というより、むしろ「王」たることが目的であったかも知れぬ。王になるには仁政をすることが近道であり、それが最良の手段であったにちがいない。また仁政をなすには君子を必要とし、君子となって仕官し得るためには「修身」する必要があると結論づけている。論語に「苟くも其の身を正しうすれば、政に従うに於て何が有らん。其の身を正しうすること能わずんば、人を正すを如何せん」云々の文意を解すれば容易に理解できよう。孟子は「夫仁政必自経界始。経界不正。井地不均。穀祿不平。」

云々といっているが、不正と不均と不平とは皆悪事の根源であり、君を怨み人を怒ることは皆この三事より発するから、上は人倫を明にして下は小民を親しくしなければならないことを明快に説いているのである。要するに孔子を中心とする儒家思想は、積極的社会化の下に政治を行わしめんと欲したことに異論はあるまい。これは悪政をやらざるために王道政治を理想とし、徳治主義をもって為政の方法となしたことに帰一する。またこれは君子の哲学として醗酵し、進んでそれに基調をおいて構成された政治学でもあった。だからこそ、孔子の最も正さんと欲したのは支配階級に属する名分であり、支配階級の道德自覚にあった。孔子が政をなすに民に信を得ることの必要を説いたのはそのためであり、「足食足兵民信之」とか「民無信不立」（論語）をつねに念頭にいれて行動を律し、支配中心の道德を考えず、絶えず被支配者中心の道德を考えていた優れた素王であった。こうしたパースナリティの一面を伺察すると孔子は今様でいう自由人であり、彼の説く王道は現代社会における全く洗練された“Democracy”の形態であるといっても一向差支えないと思える。このようにして孔子の王道政治は徳治主義に基くところの道の政治であって、終局においては完成の域に達した「礼治」であるといっても過言でない。

この項の最後に附言することは筆者は現下の政界に君臨する政治家たちに、ナニも好んで復古的乃至守旧的思想を鼓吹叱呵するわけではないにしても、「温故知新」という言葉に思いをよせて、政治的思想の実現は人に係り、人においてはその人格に係ることを重視するならば徳治主義を再顧してみてはどうかと舌頭落地したことを許されたい。

むすび

筆者は政治倫理考の目的を果すために問題提起からロッキード事件に関するサワリの部分を点滴し、核心としては東洋政治学の思想的背景の一局

部面ではあるが、師父鵜沢総明博士の遺訓書ともいうべき著書を参考に供し、できる限り簡易に説明を試みたが、結局、政治倫理は多彩な問題を惹起するので、今回は東洋政治の基本理念の大意を示す程度のもので終わってしまったが、いずれかの機会に具体論を述べたいものと考えている。

現代国家における政治倫理の重要性は言を俟たないが、社会学者もいうように社会格が順当にその力を充実向上せしむる限り、社会文化は積集上進するものと思うので、われわれは物質的にも精神的にも経済的にも政治的にも、また精神文化的にも社会濃度を高めていかねばならない。言うまでもなく、人間の心と身とを綜合統一したものが人格であるとすれば、その最も秀れたものをもっている人が、いわゆるエリートと称されるのである。このエリートは社会的俊英であり政治家もこの仲間入りをする。従って世の政治家たちは、個別認識力のうちに社会認識力を包有し、個人人格のうちに社会格を溶融し、己れの欲するところに従って、「矩」を踰えざる行動体系の持主となってもらいたい。——さすればナニもリンリンと蛙鳴蟬騒する必要はないではないか。政治は生きものと言われているように事態の動向は絶間なく変転万化するから正に「一寸先は真暗ら闇みであるが、せめても人格完成の理想型政治家の出現を期待して止まぬ。

参考文献

鵜沢総明著「法律と道德との関係」明治大学出版部 P43～P59

※先生は法律学者としては和漢洋の哲理に通暁された碩学の大人であり、学問・弁護・教育・政治等を一貫するところの高貴な世界観を抱いておられたから、その著書を読解することは極めて難艱事であるので、学生諸君のためには、——法律学と倫理学との関係のなかから引用抜萃し、できるだけ簡易化して紹介したことをお断りしておく。

同著「法律哲学」(同) P6～P9

同著「政治哲学」参照

拙稿「学校における政治的教養と道德教育」日本道德教育学会 P8～P16

拙稿「支那における君民関係と徳治思相の管見」 明治大学政経論叢
P116～P126

拙稿「東洋政治の思想的特質」 千葉敬愛経済大学研究論集（第6号）P62
じゅん刊（No.139）「世界と日本」——特集「党の出直し改革論」のなかか
ら。